（様式５）　　平成31年度（2019年度）　　教職大学院派遣研修　研究報告書

派遣者番号	管31K03	氏　名	須藤　史晴
研究主題 ―副主題―	ＡＳＤ傾向の有無による児童の読み書き困難の様態の違いの検討 ー通級におけるＡＳＤ傾向群と非ＡＳＤ傾向群の比較を通してー		
派遣先	東京学芸大学　教職大学院	担当教官	藤野　博
所属	三鷹市立南浦小学校	所属長	藤原　和彦

キーワード：アセスメント　ＡＳＤ　読み書き　ＬＤ

１　研究の背景（目的）・主題設定の理由等

東京都において読み書き困難の指導・支援を担ってきたのは、行動面の困難に対するグループ指導を中心とした情緒障害等通級指導学級と構造的な言語面の困難に対する個別指導を中心とした言語障害通級指導学級であった。特別支援教室の導入に伴い、東京都教育委員会は「『読めた』『わかった』『できた』読み書きアセスメント」（以下、「YWD」表１）を作成し読み書き困難の指導力の向上に努めている。

特別支援教室がＡＳＤ児童を主な対象にしているにも関わらず、ＡＳＤ傾向のある児童の読み書き困難については十分な検討がされていない。そこで、本研究はＡＳＤ傾向の有無により、読み書き困難がどのように異なるのか、またそれがＡＳＤに特有の認知特性とどのような関係があるのかを検討することとした。

表１　YWDの内容

検査	内容	学年
学習場面における行動のチェックリスト	学習場面における様子を8つの観点からチェックする。	1～6
①ひらがな単語正誤判断	3つの選択肢から30秒間でできるだけ多く正しい単語を選ぶ。	1～6
②音韻抽出分解	音と●の数が同じになるよう選ぶ。音が単語のどこにあるか○をつける。	1～3
③特殊音節単語	3つの選択肢から正しい単語を選ぶ。高・低頻度は1分間でできるだけ多く解答する。	1～3
④漢字書き ④漢字読み	1学年下の配当漢字を読む・書く。	2～6
⑤漢字の部品	漢字を3～4個の部分に分けて書く。	2～3
⑤漢字の部首	部首に○をつけ部首名を書く。	4～6
⑥順唱・昇順	数字を聞いて書く。そのままの順（順唱）と小さい順に並べ替え（昇順）	1～6
⑦視覚記憶	3～4個の多角形を見て覚え、同じものを選ぶ。	2～6
⑧読解　長文	長い文章を読みあてはまる接続詞を選ぶ。指示語の指しているものを選ぶ。段落および全体の要点を選ぶ。	4～6
⑨読解　短文	短い文章を読んで、明示された記述をもとに解答を書く。因果関係を把握して推論し解答を書く。	4～6

２　研究の内容・研究の方法

(1) 読み書き困難の様態の違いの検討

特別支援教室利用児童５校 35 名と言語障害通級指導学級利用児童 10 校 34 名を対象にYWDを実施した。子供のコミュニケーション・チェックリスト（以下、「CCC-2」）を用い社会的やりとり上の課題が示された群（以下、「ＡＳ群」）とそうでない群（以下、「非ＡＳ群」）を設定し、両群におけるYWDの結果の比較からＡＳＤ傾向の有無による読み書き困難の様態を比較した。校長の研究承諾を得た上で対象者を募集し、保護者から文書で研究承諾を得た。研究を進める上で、個人情報の保護及び倫理上の配慮を行った。個別の検査結果は文書にて特別支援教室または言語障害通級指導学級指導担当者にフィードバックした。

(2) ＡＳＤに特有の認知特性の程度の測定

Kimchi(1998)とScherf et al.(2008)の方法を用いてＡＳＤに特有の認知特性を測定するためのES/CS テストを作成し、定型発達クラスと自閉症クラスのある私立小学校在籍児童 30 名に実施した。校長の研究承諾を得た上で対象者を募集し、保護者と可能な場合は本人に文書で研究承諾を得た。研究を進める上で、個人情報の保護及び倫理上の配慮を行った。研究結果は文書で示すとともに学校主催の報告会で報告した。

(3) ＡＳＤに特有の認知特性との関連の検討

(1)と同じ対象にES/CSテストを実施し、ＡＳＤに特有の認知特性と読み書き困難の様態の関連性について検討した。

３　研究の結果

(1) 読み書き困難の様態の違いの検討

ＡＳ群と非ＡＳ群に絵画語彙発達検査改訂版やレーブン色彩マトリックス検査を実施したところ、両群に５％水準で有意な差は見られなかった。YWDについては、ＡＳ群は非ＡＳ群に比べ、

ひらがな単語の流暢な読み（２文字・４文字）課題や漢字単語の読み課題（高心像・低心像）、などで好結果の傾向が見られた。漢字単語の書き課題の誤り方の分析からは、有意な差は見られなかった。表２は両群のＹＷＤの下位 10 パーセンタイル以下の結果につまずきのある児童の割合と独立性の検定から残差分析の結果をまとめたものである。

表２　ＹＷＤの結果につまずきのある児童の割合と残差分析の結果

		AS群	非AS群
ひらがな単語正誤判断	2文字単語	54% ▽	78% △
	4文字単語	50% ▼	88% ▲
音韻抽出分解	抽出	0%	8%
	分解	25%	17%
特殊音節単語	撥音	13%	25%
	促音	13%	25%
	拗音	13%	33%
	拗長音	38%	42%
	高頻度	38% ▽	83% △
	低頻度	75%	83%
漢字読み	全体	39% ▽	70% △
	高心像単語	32% ▽	63% △
	低心像単語	46% ▼	78% ▲
漢字書き	全体	61%	70%
	高心像単語	72%	65%
	低心像単語	50%	73%
漢字の部品		13%	27%
漢字の部首	位置	20%	21%
	名前	50%	64%
順唱・昇順	順唱	39%	50%
	昇順	21%	13%
視覚記憶		46%	42%
読解　長文	要点把握	74%	70%
	接続詞	42%	67%
	指示語	63%	70%
読解　短文	明示	30%	26%
	可逆	90%	78%

△ p<.05で期待度数より高い，▽ p<.05で期待度数より低い
▲ p<.01で期待度数より高い，▼ p<.01で期待度数より低い

⑵　ＡＳＤに特有の認知特性の程度の測定

ES/CS テストの４種の反応時間のうち、先行研究で用いられていない２種を減算することで新たな指標（グローバル・ローカル差：数値が小さいほど細かい部分に着目しやすい）を算出した。ＡＳＤの症状・状態との間に一定の相関関係が認められたため、グローバル・ローカル差をＡＳＤに特有の認知特性の指標の候補とした。

⑶　ＡＳＤに特有の認知特性との関連の検討

グローバル・ローカル差が小さい（細かい部分に着目しやすい）ケースでは、ＹＷＤの音韻分解と特殊音節単語（促音）の正答数が多い傾向だった。ＡＳ群の中だけでみると漢字読みの無答数が増え、非ＡＳ群の中だけで見ると音韻分解の正答数が多く、特殊音節単語（高頻度・低頻度）が好結果の傾向だった。

また、グローバル・ローカル差と CCC-2 の合成得点である SIDC 及び評価点に相関関係は認められなかった。

４　研究の考察

ＹＷＤを用いて読み書きの実態を把握し、通級による指導担当にフィードバックすることができた。その中で、ＡＳ群に特有の読み書きの困難として、読み困難の少ない層、つまり書きのみの困難をもつ層の存在を指摘できる結果となった。

漢字の読みやその他の基礎スキルに潜在的な弱さがないにもかかわらず、漢字の書きのみに困難がある、そういった様態がどのような機序で発生するのかについては、幼児期（ＡＳＤの特性は観察可能なものの読み書き困難が顕在化していない時期）からの縦断的な研究の必要性を指摘できる。一つの可能性として、漢字書字の学習活動そのものへの参加の困難が想定できる。

また、グローバル・ローカル差と読み書き困難の様態の関連性の検討からは、グローバル・ローカル差の示す読み書き困難とＡＳ群に特有の読み書き困難の関連を示す結果は示されず、ＡＳＤに特有の認知特性が直接的に読み書き困難に結びついてはいないという結果であった。このこと及びグローバル・ローカル差と CCC-2 の SIDC 等とに関連は認められなかったことから、グローバル・ローカル差は能力というよりは心的状態と結びついており、その可変性や選好性を仮定できる。この仮定は先行研究と矛盾しない。(Mottron et al., 2006, Pellicano & Burr, 2012)

５　今後の展望

ＡＳ群は、75%が特別支援教室で支援を受けている。本研究は、特別支援教室での読み書き支援の方向性の一つを示すことができたと言える。各困難の顕在化する学年と背景要因についての精査や、効果的な支援方法の開発は今後の課題である。

今回の研究で新しく作成された指標であるグローバル・ローカル差の小ささ（細かい部分への着目しやすさ）は、能力というよりは心的状態に結びついている可能性が推察された。ＡＳＤの好き・得意を活用した、新しい指導・支援の開発も、今後の課題である。